

アビタス通信

A b i t u s P r e s s

32

vol.

July 2014

Abitus

IFRS

IFRSの動向と日本企業による 任意適用への対応

公認会計士
JBAグループ顧問
企業会計基準委員会(ASBJ)前副委員長
加藤 厚氏

動き始めた日本でのIFRS任意適用

IFRSの適用に関して、2011年6月、自見金融担当大臣(当時)の「2015年3月期からの強制適用はない」との発言があって以来、企業での動きもしばし下火になっていました。それから2年後の2013年6月、日本でもIFRSに関して集中的な動きが始まりました。経団連が「今後のわが国の企業会計制度に関する基本的考え方～国際会計基準の現状とわが国の対応」を出すや、自民党の企業会計に関する小委員会が直ちに「IFRSへの対応についての提言」を6月13日に発表しました。それを受けて6月19日、企業会計審議会が「国際会計基準(IFRS)への対応のあり方に関する当面の方針」により今後の方向性を示しました。

日本における任意適用という方向性が決まり、強制適用については任意適用の動き等を見て決めるという方針が出されたことで、任意適用する企業も徐々に目立ち始めました。2014年5月時点でIFRS採用企業(予定を含む)は42社となり、米国基準を採用している企業数を超えました。時価総額でも、日本の証券取引所の1割を超えるのではないかとされています。

ただし、その動きはいまだ緩慢であることは否めず、爆発的な増加には至っていません。韓国が任意適用を本格的に開始した2011年には1,000社を超える会社が導入したことを考えれば極めて緩いですね。自民党は「提言」の中で、安倍政権の集中投資期間の方針にのっとり、2013年から3年以内に300社という一つのターゲットを出しているが、今のままでは300社は遠い数字の

ようです。

多くの人が抱く懸念は、現在日本が確保しているIFRS財団の評議員とモニタリングボードというポジションを維持できるかということです。モニタリングボードを出すには、「IFRSが顕著に使われている」という一つの要件があります。具体的な数字があげられているわけではないが、現状では2016年末までに、“顕著”に使われているという段階に入るのは難しいかもしれません。



IFRSを使うメリット

いずれにしても、企業にとってIFRSを使うメリットがなければ任意適用は進みません。世界中で導入が進んでいるのは、企業にとってメリットがあるからです。どんなメリットがあるのか、ここで整理してみたいと思います。

一つ目に「海外の同業者との比較可能性の向上」があります。海外ではIFRSを使っている企業が多いので、同じ基準で比較できることで、ステークホルダーにとっての財務諸表の利便性が高まります。日本でIFRSを適用している会社も、商社や製薬など国際的なマーケットで競争している業種が多いですね。ところで、薬品業界や自動車業界など欧州の会社がIFRSを使う大きなメリットの一つに、「開発費の資産計上」があります。新薬開発や新車開発には膨大な資金が投入されます。

IFRS では、一定の要件を満たせば開発費は資産計上できます。膨大な開発費が日本基準では経費で落とされ、欧州では資産計上されるわけです。それで比較されて「日本の会社は利益が少ない」と言われては不公平極まりないですね。同じようなことは、のれんにも当てはまります。日本では、のれんは規則的に償却され毎期費用計上されるが、IFRS では減損が起きるまでは償却しません。この面でも、日本企業は不利な立場に立たされるわけです。国際比較の面で同じ土俵に立つことができるのは IFRS であり、IFRS 適用の大きなメリットです。

二つ目に「海外投資家や取引先による財務内容の理解の向上」があげられます。かつて英国の新聞に「不思議の国の会計」と揶揄されたように、残念ながら世界から日本基準は「独特な基準でわかりづらい」という見方をされているようです。そのため、海外投資家から会社の実態を正しく理解してもらえない恐れがあります。IFRS を使えば、その心配はありませんね。

三つ目は「海外での資金調達が可能となる」こと。例えば、米国証券市場に上場する際など、日本基準であれば米国基準との調整表をつけるなどやっかいな作業が必要となるが、IFRS ならそのまま大丈夫です。

四つ目は「連結が簡単になる」ことです。海外の子会社、持分法関連会社で IFRS を使う会社が増えています。日本の親会社を含めて IFRS で統一すれば、基準間差異の調整が不要となり連結作業が容易かつ迅速に行えます。

五つ目に「JPX 日経 INDEX400 を選ぶ際、加点される」ことをあげておきましょう。JPX 日経 INDEX400 とは 2014 年 1 月から東証で使われるようになった新しいインデックスです。400 社に選ばれる基準の一つに、IFRS を使っていれば定性的な要素の加点となり、これが IFRS 適用のインセンティブの一つになるとみられています。実際にはこの加点のウェイトは余り大きくないようだが、これまでになかったインセンティブができたことは前進だと思います。

ここまで五つの会計面のメリットをあげてきたが、内部的な経営管理面でのメリットも見逃せません。

まず、グローバル企業としての経営基盤を国際的に統一して確立できるという大きなメリットがあります。経理や財務面だけの統一ではなく、予算管理や人事管理、販売・製造管理などグループ全体の内部管理の方法を、グローバル企業として国際的に統一したもので経営基盤を確立できるのです。IFRS 適用を契機として、会社の IT システムや経営管理システム、内部管理システムを

改善するというのも一方法でしょう。「IFRS を適用するとシステム変更のコストがかさむ」ことをデメリットの一つとしてあげる声をよく耳にします。しかし、通常は IFRS のためだけにシステムを変更するわけではないと思います。IFRS 導入を契機に、他の社内システムの改善も図るのが通常と思われます。海外子会社を含めた国際ネットワークシステムを構築したり、世界中の棚卸資産や有形固定資産の在庫管理、減価償却や減損の改善や統一といったシステムをつくりあげるわけです。IFRS 適用はそのためのトリガーとなります。そうであれば、IFRS 任意適用に対する経営トップの理解も得られるのではないのでしょうか。

IFRSに関する誤解を解く必要がある

なぜ IFRS を日本企業は使わないのか。よく言われるのは、「コストに見合ったベネフィットが得られないのではないか」というデメリットの指摘です。しかし、先に述べたようにベネフィットが上回るようなやり方とすることは十分に可能で、そこが経営者の腕の見せ所でもあります。

さらに、いまだに IFRS に対するかたよった見方、誤解も多いようです。例えば、「IFRS は全面時価会計だから棚卸資産も有形固定資産もすべて時価で評価しなければならない。だから日本の製造業には向かない」というのは大きな誤解です。また、「貸借対照表は資産も負債もすべて公正価値で測定してその差額（包括利益）を会社の業績とみなす。その結果、日本の経営者が最重要視している当期純利益を IFRS は軽視している」とか、「IFRS は、企業を解散価値で測定するような会計基準だから M&A のための会計である」という誤解もあります。このように、日本でしばしばデメリットとしてあげられるものの多くは、実は誤解に基づくものと言えるでしょう。2012 年 10 月に、IFRS 財団は世界の人達による誤解と思われる主なものをリストアップし、それに対する正しい理解を対比したデータを公表しています。それらを参考にして、IFRS を正しく理解した上で任意適用を考えていただきたいと思います。また、IASB が現在見直しを進めている概念フレームワークのなかでも、これらの誤解を解くような手当を検討中です。

エンドースメントされたIFRSの意義

企業会計審議会が出した「当面の方針」の中で、ASBJ がつくることを求めている、いわゆる JIFRS（日本に適した修正版 IFRS）の出来上りを待っている企

業もあろうかと思われます。これは、IFRSの個別基準をひとつひとつチェックして日本に合わない箇所は削除または修正するエンドースメント手続きによってもう一つのIFRSを作るというものです。ピュアIFRSとエンドースメントされたIFRSのどちらにするかは、任意適用しようとする企業の判断に困るところだと思います。

エンドースメント手続きにおいては、まず削除または修正する、あるいはガイダンスや教育文書等を作る項目の候補をとりあえず30以上洗いだし、現在それらの絞り込み作業の最中です。まだ結論は出ていないが、有力な削除または修正候補として大きく二つの項目があげられています。一つは「その他包括利益(OCI)のリサイクリング」です。IASBは一部のOCIについてリサイクリングを認めていないが、日本はすべてのOCIをリサイクリングすべきと主張しています。もう一つは「のれんの償却」です。先ほど触れたように、会社を買収した時に発生したのれんを、IFRSでは規則償却はせず減損が起きたときに臨時的に償却します。日本では通常20年以内の定額償却であり、日本ではのれんは規則償却すべきだとの声が高いです。一方、「リサイクリング」「のれんの償却」と一口に言っても、それらに関連する会計処理や開示の項目がたくさんあります。それらを含めてあまり広く修正するとIFRSと言えなくなるので、限定した修正の仕方に進むような議論が行われているようです。しかし、もしそうなるとおかしな形の基準が出来上がることになるのではないのでしょうか？例えば、のれんに関する会計基準の中で、買収により取得した無形資産の識別の処理に全く触れないで償却の部分だけ直すと、対象となるのれんの中身がIFRSとは違ったまま償却だけ日本基準にするという変則的な基準になってしまいます。リサイクリングにも同じようなことが言えます。退職給付債務の数理計算上の差異の計算方法は、IFRSと日本基準では異なるのに、それには目をつぶってリサイクリングだけ取り入れるのは、同じ基準内の整合性がとれていないことになります。また、日本は、当期純利益とOCIの違いは単なるタイミング・デファレンスだからすべてのOCIはリサイクルすべきと強く主張しているのに、今回のエンドースメント手続きでは、一部のOCIだけを削除または修正の対象にすることを検討しているようで



す。このようにして出来上がったエンドースメントされたIFRSは、もはやIFRSでも日本基準でもない、異次元の会計基準と言わざるを得ないのではないのでしょうか？

エンドースメントされたIFRSがそうした形でできた場合、それを企業が採用するメリットは何かを考えてみたいと思います。まず、海外の同業他社とも比較できず、ステークホルダーによる企業実態の理解はますます難しくなるのではないのでしょうか？監査報告書にはIFRSに準拠した財務諸表という監査意見が出るかどうかは難しく、もし出ない場合には米国の証券市場ではそのままでは使えないと思います。そうすると、資金調達面のメリットもありません。

もしこのような推測が当たっている場合には、任意適用を考えている会社でエンドースメントされたIFRSの完成を待っているケースがあるとすれば、待つべきかどうかは再検討する必要があるように思われます。任意適用するのであれば、ピュアIFRSを使う方が経営上の迅速な意思決定ができるのではないのでしょうか。

ところで、エンドースメントされたIFRSは使ってもらうために作るのではなく、ピュアIFRSのどこが日本に合わないかをしらみつぶしにチェックすること自体に意義があるという人達もいます。そのようなエンドースメント手続きを通じて、「包括利益はリサイクルすべきだ」とか「のれんは規則償却すべきだ」と議論することにより、IASBへの意見発信を行うという考え方のようです。

しかし、日本の意見が必ずしも統一されていない面にも留意するべきと思われます。例えば、のれんの償却に

ついでです。ベンチャー企業のように買収を盛んに行っているような会社には、のれんは償却しないほうがいいという意見が多いと思われます。そこにメリットを感じてIFRSに移っている会社もあると思われます。そうした会社にとっては、エンドースメントされたIFRSにおいてのれんの償却が行われるようになれば、迷惑なことであり、結局、ピュアIFRSの方を使うのではないのでしょうか。

任意適用上問題となる個別会計処理への対応

IFRSを任意適用する際に、現場で大きな問題となるのが個別の会計処理です。例えば、「IFRSを適用する場合に、資産の減損はどうすればいいのか？」あるいは、「減価償却方法は定額法にしなければならないのか？（最近理解が進んできたので、定額法でなければならないという監査法人は減ってきた）」、「税法基準で行っている耐用年数をどうすればいいのか？」といった問題は切実です。また、連結の範囲や決算期統一の問題もあります。IFRSは、原則として決算期のズレを認めません。多くの日本企業は3月決算がいまだに多く、一方、海外子会社の決算期は概ね12月です。将来のIFRS適用を見据えて海外子会社の決算期を3月にしたり、逆に日本の親会社の決算期を12月にする会社も増えてきているようです。さらには、日本では有給休暇引当金を計上しないがIFRSでは引当しなければなりません。以上述べたような個別会計処理への対応から会計システムの変更まで、任意適用に際しての検討課題は多いと思われます。

それに応えるべく、経団連のIFRS実務対応検討会が出している「IFRS任意適用に関する実務対応参考事例」（2014年1月15日版が最新）の中には、今まで述べたものおよびそれら以外の個別会計処理の実務上の課題について、実際にIFRSを適用した会社や任意適用を考えている会社が検討した事例が参考として載っています。これは極めて有効なツールなので、これから任意適用の検討をしようとしている会社は是非これを参考にしたいと思っています。

IFRSの任意適用に備える

世界における会計基準は、時間はかかってもいずれIFRSに統一されていくものと思われます。ただ、日本の多くの人達が気にかけているのは、米国がIFRSにやや後ろ向きであるということでしょう。日本の官民には、一般的に米国に歩調を合わせるという面があり、日本が米国に先駆けて強制適用することにはためらいもあるの

でしょう。そうは言っても、日本が今のままでいられるはずありません。米国基準とIFRSはかなり似ている上、米国基準を使っている会社は世界でも多いですね。日本基準を使っているのは日本企業だけであり、IFRSとの相違点も多いのです。日本は、かのお見聞談話以降コンバージェンスを止めているので、日本基準とIFRSの乖離はますます広がっています。他方、米国基準は徐々にIFRSに近づいています。米国を待っていては、日本企業は間違いなく出遅れると思います。

中長期的に見れば、世界の会計基準はいずれIFRSに統合されていくと思います。企業活動のグローバル化が進展する中、IFRSを他人事と考えていられる会社は多くはないと思われます。従って、会社は将来のIFRS適用に備え、今からヒト・モノ・カネといった経営資源の一部を、IFRS適用に向けた準備に振り分けておくべきだと思います。常にIFRSの動きをキャッチアップし、適用する場合の会社の対応策を継続的に考えていくべきでしょう。それによって、会社の経営管理手法はよりグローバル・スタンダードになっていきます。日本のトップマネジメントの方々が、広くそうしたマイノリティを持っていただくことを願ってやみません。

Profile

かとう あつし氏

公認会計士、JBAグループ顧問

企業会計基準委員会(ASBJ)前副委員長

2014年1月から、国際会計士倫理基準審議会ボードメンバー。

企業会計基準委員会委員(常勤副委員長、非常勤委員)を約10年間務める。その他、コントロール・ソリューションズ・インターナショナル(株)代表取締役社長、あらた監査法人代表社員、中央青山監査法人代表社員、クーパース・アンド・ライブランド 東京事務所パートナー等を勤める。

会計・監査専門家としての活動には、日本公認会計士協会常務理事、金融庁・企業会計審議会臨時委員・幹事、証券監督者国際機構(IOSCO)に関する金融庁のテクニカルアドバイザー、国際会計基準委員会(IASC)金融商品起草委員会委員、中央大学専門職大学院特任教授、等多数ある。

内部監査で求められる 三つのコミュニケーションスキル

理解し、理解してもらい、実行してもらうために

米国公認会計士
生涯学習財団認定コーチ
株式会社genten代表取締役
高橋信也氏

内部監査にカスタマイズされた コミュニケーションスキル研修

——内部監査部門で求められるソフトスキルのトップにコミュニケーションスキルがあげられています。そもそもコミュニケーションスキルとは何でしょうか？

高橋 私には内部監査部門に必要なコミュニケーションスキルを、①ヒアリングスキル、②ライティングスキル、③プレゼンテーションスキルの三つに定義しています。

①ヒアリング力は監査先を正しく「理解する」ために不可欠です。②ライティング力は監査報告書によって素早く正確に「理解してもらう」ために必要です。最後の③プレゼンテーション力は内部監査部門で肝心の「実行してもらう」ために極めて重要です。

——なるほど。最初にゴールに応じた定義をきっちりされるので、効果が望めるんですね。いつもそうした定義を最初にされるのですか。

高橋 そうですね。同じコミュニケーションスキルでも、新入社員の人に求められるものと社歴を重ねた方に求められるものは当然異なりますし、職種によっても大きく違ってきます。そして何よりも、コミュニケーションスキルの定義を共有することが重要だと考えています。

——「内部監査部門」にカスタマイズされたコミュニケーションスキルの研修になるわけですね。三つのスキルの概要を教えてくださいませんか。

高橋 その前に、もう一つ共有しておきたいことがあります。コミュニケーションというと、言葉によるものと考えがちです。しかし、バーバルコミュニケーション(言語によるコミュニケーション)はコミュニケーション全体のわずか7%と言われています。残りの9割以上は言語を使用しないノンバーバルコミュニケーション、つまり表情や身ぶり・手振り、身なりといった態度などが占めます。腕組みして苦い顔をしている人からは拒否感を感じたり、笑顔でうなずきながら話を聞いてくれる人には安心して話ができることは、誰もが経験しているのではないのでしょうか。私の研修では、まずはそのことを共有していただきます。

さらに、十人十色といいますが、人には一人ひとり個性があり、さまざまなタイプ

があります。例えば自己主張と感情表現の強弱で分類すると、両方強い人から両方弱い人まで四つのタイプに分類できます。自分のタイプを改めて確認した上で、それぞれのスキルに磨きをかけていただきたいと思います。



ヒアリングで正確に事実をつかむ

高橋 「ヒアリングスキル」は、ふだん誰もが使っているスキルです。ところが、聞いているようで実際は、人は驚くほど聞いていません。研修では、まず、そのことを実感していただきます。

そして、ヒアリングしやすい環境を生み出すための①「アイスブレイク」、相手が無意識に自分と似た存在だと感じて好意や安心感を感じてもらう効果のある②「ミラーリング」や③「ペーシング」、相手が理解され受け入れられていると感じる④「バックトラッキング」など、ワークを含めて、⑤「傾聴」のスキルを身につけていきます。傾聴とは相手の話だけでなく、心にも耳を傾けます。人は話したい生き物です。話を聞くことは簡単なようで難しく、ついつい自分の意見を言ったり話をしたくなります。しかし、話を途中で遮られると誰でも不快なものです。話したい欲求を横に置いて、相手の話と心に耳を傾けます。

そうして耳を傾けながら、質問に入っていきます。話が抽象的でわかりづらかったり漠然としたりしているときは、⑥「チャックダウン」していきます。チャックダウンとは、塊をほぐして詳細を確認することです。5W3H(When、Where、Who、What、Why、How、How many、How much)で質問を行って、気付きを促します。また、話が細かなことに終始したり、分散してまとまりを欠くようなときは、逆に⑦「チャックアップ」を行って全体像や最終ゴールを確認します。具体的には、「～～ということですか?」とか「～～の

ために必要なわけですね？」など、全体をまとめて塊ができるような質問を行います。ちなみに質問には、5W3Hのような「はい」「いいえ」で答えられないオープンクエスチョンと、「はい」「いいえ」で答えられるクローズドクエスチョンがあります。後者は答えやすいメリットはありますが、話に広がりが出ずにすぐに終わってしまいます。

思考を切り替えたり新しい視点がほしいようなときは、「If 質問」が有効です。「もし〜だったら？」という質問で別の観点からの話が引き出せるかもしれません。

また、「他に何かありますか？」と「スライドアウト」の質問をすることで、今までの話の内容とは全く違った内容の話を引き出すことも可能になります。

——ヒアリング一つとってもいろいろなスキルがあるのですね。

高橋 ヒアリングは、きっちりとした事実をつかむために最重要なコミュニケーションスキルです。気を付けていただきたいのは、次のライティングでも言えることですが、事実と主張や意見をきっちりとわけることです。基本的なことがらですが、この仕分けをきちんとして事実を浮かび上がらせることで、なにげなく行っていることを考えてもらうきっかけにもなるでしょう。

パラグラフライティングを習得する

——ライティングスキルは、読み手からスキルアップの要望がたくさんあります。マネジメント層にポイントを正確に素早くつかんでもらうことは内部監査部門の大きな役割でもあります。

高橋 ライティングスキルで重要なのが、まさにそうしたこと、つまり読み手の気持ちになって書く、ということです。読みたいと思ってもらえる文章には、それなりの構造があります。基本は「結論ファースト」と「パラグラフライティング」です。最もよい例は、ヤフーのトップページに出てくるニュースの見出しです。たった135文字の見出しを見て、読み手は読む、読まないを判断します。そこに読みたいことが書いてあることをわかってもらうために、最も言いたいこと（結論）を端的にあらわした表現を用います。そこをクリックすれば、見出しで掲げられた内容の詳細がわかります。

この技術をライティングスキルとして使うと、①出だしに端的な要約文（見出し）を配して、②一つのパラグラフでは一つのトピックだけを書く、ということになります。当然、トピックの数だけパラグラフが必要になり

ます。それを心がけるだけで、報告書はぐんと伝わりやすくなります。

また、要約文だけを読んでも理解できるように全体を論理的に組み立てるには、いきなりパソコンに向かって書き始めるのではなく、手書きでざっとしたロジックツリーをつくっておくことをお勧めします。そうすれば、もれなくダブリない報告書を書くことができるでしょう。

「話すのは得意だけど、書くのは苦手」という人がたくさんいます。しかし、心配は無用です。理解してもらうことが基本ですから、上記を意識しながら相手に話しかけるように書いていけば、伝わる報告書ができること請け合いです。

——なんだか書くのが楽しくなってきました。

高橋 そう思っていたら成功です。研修では具体例をあげて、ライティングのワークも用意していますから、そこで自信を深めてもらえると思います。

プレゼンはWhy?から始めて実行を促す

——最後のプレゼンテーションスキルが、「実行してもらう力」という括り方は新鮮です。

高橋 内部監査の目的を考えれば、プレゼンテーションは「実行してもらう」ために行うことになります。プレゼンテーションの目的は次の3段階に分類できます。まず内容を正確に伝えて理解してもらい、次に疑問点を取り払い納得してもらいます。そして最終的に、実行してもらわなければ実効性のある内部監査とは言えません。

実行できていないとすれば、理由は三つです。①知識がない、②技術がない、③わかっているのに実行できない——これら三つのどれに該当するにしても、自らできない理由を克服するよう動いてもらわなければなりません。

——自ら動いてもらう、というのが難しそうですね。

高橋 そうですね。ナイフをつきつけて脅迫すれば人は嫌でも動きます。しかしそんなことは現実にはできないし、仮にできたとしても、それは本人のためにも会社のためにもなりません。本人が納得して自ら動くようになるには、「動かなければ」という気付きを与えることが必要です。通常プレゼンテーションと言えば、もっぱら提案を行います。しかし、それだけでは相手に気付きは起りません。気付いてもらうには、「質問」による双方向のコミュニケーションが不可欠です。ここでも、ヒアリングスキルであげた5W3Hのオープンクエスチョンが活躍します。

プレゼンテーションは、具体例や数値といったデータに裏付けられた「現状」から始めます。次に現状と照らしながら、「なぜ理想（ゴール）に届かないか？」を考えていきます。それには、理想の共有が必要であり、「なぜ（Why）」の共有が必要です。詰問的に「なぜ？」と問いたただすのではなく、いっしょに「なぜ？」と考えていくのです。この「なぜ？」が人を動かす大きな原動力となっていきます。

こうした“Why？”から始めることの重要性和有効性は、サイモン・シネックがTED（カンファレンス）のプレゼンテーションで「ゴールデンサークル」として紹介し世界に知られるようになったので、ご存知の方も多いでしょう。「ゴールデンサークル」とは、卓越した革新的リーダーや会社は共通して、「Why？→How？→What？」という思考パターンをとっており、それは通常の思考パターンである「What？→How？→Why？」とは正反対であることを彼は発見しました。

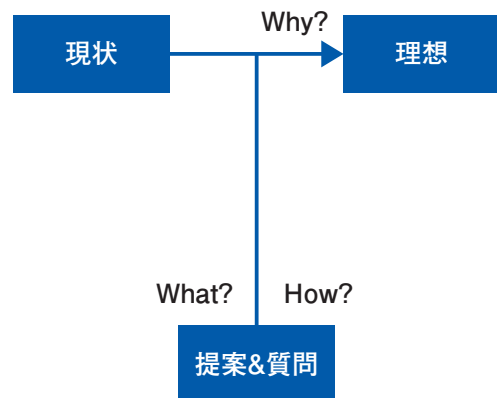
例えば新商品のプレゼンを行う場合を考えてみましょう。普通の人や会社は、What？から始め、How？の説明を行います。「今度、非常に高性能のPCを発売します。それはこんなふうに優れています」というふうに、スペックの説明や他社との比較に力点は置かれます。しかし、「なぜ、その商品を発売するのか」については、ほとんど説明されません。一方、プレゼンの達人としても知られたアップル社の創業者、スティーブ・ジョブズはそうではありませんでした。「私たちはなんのためにこの商品を世界に送り出すのか？」「世界を変えるためである」と最初に「なぜ？」と「理想」から入ります。それのみが、人を動かす力となった——サイモン・シネックは、そのように分析しています。この論理は誠に説得力のある理にかなったものです。

「Why？」と「理想」が共有できたらもはや相手は動こうという気持ちになっているはずです。ここまでくれば半分以上成功です。次に具体的な実行策を、提案とオープンクエスチョンを繰り返しながら探っていきます。このとき使うのは、「How」と「What」を中心としオープンクエスチョンです。

——「Why？→How？→What？」のゴールデンサークルをつくることで、理想に向かって動いてもらうのです。そうしたやり方であれば、自分たちで掲げた理想であり、自分たちでつくり上げた実行策であるという気持ちが強まり、動こうという気持ちになりそうです。

高橋 そうですね。人は他人から言われるとやりたくないと思っても、自分から言い始めたことは決してやりた

プレゼンテーションの流れ



くないとは思いません。そうした気持ちは子供も大人も同じですね（笑）。

全社で内部監査のWhy?を共有する

——ありがとうございます。現場が内部監査を歓迎してくれる会社は少数派だと思います。「なにかアラさがしをしにやってきたのではないか？」「こんな忙しいときに内部監査につきあっていられない」といった微妙な雰囲気ある現場も少なからずあると聞きます。それが内部監査と現場のコミュニケーションの障害になっている場合も少なくないように思います。最後にその障害を取り除くためのヒントをいただけますか。

高橋 それは、まさに“Why？”から始める根本的なテーマですね。なぜ内部監査が必要なのか。その共通した答えをトップマネジメントから現場まで持つような環境づくりが望まれるのではないのでしょうか。

——確かにそうですね。トップが内部監査に深くコミットしている会社はうまくいっているという話を聞きます。本日はどうもありがとうございました。

Profile

たかはし しんや氏

佐賀大学経済学部卒業。大手建設会社にて会社倒産を経験。株式会社船井総合研究所、米国PPM(Physician Practice Management)会社勤務を経て、2006年経営コンサルティング会社、株式会社Value Linkを設立。医療機関を中心にマーケティング、マネジメント全般のコンサルティングを行っている。また、2011年株式会社gentenを設立し、コミュニケーションに特化した研修事業をスタート。米国公認会計士(U.S.CPA)。株式会社アビタス、米国公認会計士コース講師。

公開講座・イベントスケジュール

下記以外にも各種講座・イベントを開催しています。最新の情報はアビタスWebサイトをご覧ください。

7/18(金) 16:00~18:00 **セミナー**

**3つのキーワードから読み解く、日本企業勝ち残りのための人材戦略
人口減少、グローバル化、そして横ならびからの脱却**

■会場：アビタス八重洲校 ■定員：50名 ■講師：田原 中男氏 BMD リサーチ代表 公認内部監査人 (CIA)
■参加費：無料 ■主催：アビタス ■セミナー詳細・申込 URL：https://www.abitus.co.jp/partner/p_special/jinzai3.html

7/28(月) 14:00~17:00 **セミナー**

IPO経験者が語るIPO実務のポイント IPOセミナー

■会場：アビタス八重洲校 ■定員：30名 ■対象：上場準備企業の経営者、管理部門責任者、経理担当者
■講師：田端 信也氏 株式会社シグマックス 取締役 CFO 織茂 敬俊氏 ジャパン・ビジネス・アシュアランス(株)シニアマネージャー
■参加費：無料 ■主催：アビタス/ジャパン・ビジネス・アシュアランス株式会社
■セミナー詳細・申込 URL：https://www.abitus.co.jp/partner/p_special/ipo.html

本セミナーでは昨年12月に上場した株式会社シグマックスの取締役 CFO である田端信也氏にご出講を願い、IPO実務のポイントをご自身の体験談を通じて講演していただきます。

IPO経験者の体験談を聞く貴重な機会として、ぜひご活用ください。

IFRS コンソーシアム委員会 7月3日(木) 第1回名古屋 IFRS コンソーシアム委員会を開催いたしました!



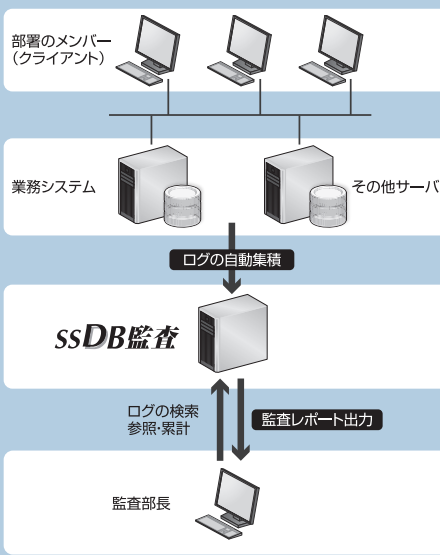
東京・関西合わせて約40社で活発な意見交換を行ってまいりました当委員会ですが、このたび、新たに『名古屋 IFRS コンソーシアム委員会』を組織いたしました。

7月3日(木)に東海地区を代表する10社にお集まりいただき、「収益認識」をテーマに取り上げ第

1回目の委員会を開催いたしました。

今後も、従来にも増してより活発な議論の飛び交う事例研究会を通じて広く国内に意見発信を行い、日本企業全体の国際競争力強化に向けた取り組みをしてまいります。

導入事例：大手金融機関様



Oracle Database/Microsoft SQL Server 対応データベース監査ソリューション

ssDB監査

今日からできるデータベース監査

簡単 GUIによる直感操作で監査設定

確実 全アクセスログを漏れなく取得

連携 ログデータを他システムへ連携

リリースから7年 金融系をはじめ、多くの企業に導入されています。

株式会社システムエグゼ

<http://www.system-exe.co.jp>

〒104-0028

東京都中央区八重洲2-7-2 八重洲三井ビルディング5階

お問合せ TEL:03-5299-5352

mail:mktg@system-exe.co.jp FAX:03-5299-5354

アビタス通信 Vol.32 2014年7月発行

発行——株式会社アビタス

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-1-1 新宿マインズタワー 15F

発行人——三輪豊明

編集担当——広報・金元

abitus@abitus.co.jp TEL 03-3299-3223

本誌よりの無断転載・訳載を禁ず

アビタス・ネットワーク

【新宿】〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-1-1 新宿マインズタワー 15F
TEL 03-3299-3330 FAX 03-3299-3777

【八重洲】〒103-0027 東京都中央区日本橋 3-6-2 日本橋フロント 4F
TEL 03-3278-8800 FAX 03-3278-8801

【大阪】〒530-0017 大阪府大阪市北区角田町 8番1号 梅田阪急ビルオフィスタワー 21F
TEL 06-6365-8660 FAX 06-6365-8661